

Book List ～沖芸の先生による、今読むべきこの15冊～ Vol.10

映像における「ルック」を 考えるための15冊

選者：土屋 誠一

沖縄県立芸術大学美術工芸学部准教授、近現代美術史／視覚文化論

県立芸大の先生が
選ぶおすすめ本!

『新海誠展「ほしのこえ」から「君の名は。」まで』

朝日新聞社、2017年

L/778.77/SH64/



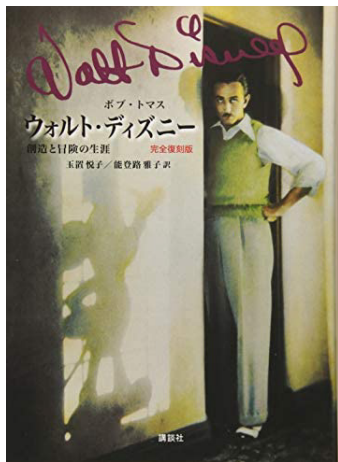
当時沖縄にも巡回してきた、アニメーション監督の新海誠（1973-）の作品を取り扱った、展覧会カタログです。『君の名は。』（2016年）での大ヒットを受けて開催されたこの展覧会ののち、やはりヒットしたものの賛否の分かれた『天気の子』（2019）を経て、最新劇場アニメーションの『すずめの戸締り』（2022年）の上映が始まっています。新海というアニメーション監督の特異性は、いろいろありますが、『君の名は。』において本格的に開拓されたような、いかにもアニメ的なキャラと、写真的なりアリスティックな「ルック」が、違和感なく組み合わせられている手法を編み出した点が、彼の功績でしょう。そんな新海作品の最新作を観るお供に、このカタログに目を通してはいかがでしょう？

ボブ・トマス

『ウォルト・ディズニー 創造と冒険の生涯』

玉置悦子・能登路雅子訳、講談社、1983年

/778.3/D78/



今日のアニメーションには、セリフや効果音やBGMなどがついていますが、20世紀初頭の映画には、音がついていませんでした（いわゆる、サイレント映画ですね）。1928年に、アニメーションのトーキー映画を初めて公開したのが、他ならぬウォルト・ディズニーで、『蒸気船ウィリー』という、たった7分程度の短編映画でした。ウォルトのアニメーションにかける情熱は尋常ならざるものであって、確かに作品は子ども向けかもしれませんが、多くの工夫を凝らして生み出されたその「ルック」は、今日に至るアニメ映画の基礎となっています。本書は、そんなウォルトの、数多くの事跡を丁寧にたどった伝記本ですが、このクリエイターの秘密を、本書を通じて覗いてみることができます。

『太陽と風とカンカラ三線』

『沖縄を見つけた写真家平良孝七の世界』

平良孝七写真展実行委員会事務局、2002年

K/74/TA23/



現在、沖縄県立博物館・美術館にて、戦後沖縄を代表する写真家のひとりである、平良孝七（1939-1994）の回顧展が開催されていますが、本書は、本年の回顧展の土台になった、平良の没後のはじめての、20年前に開催された回顧展のカタログです。デジタル化、スマートフォン、インスタグラム、といったように、写真をとりまく環境は、かつてとは根本的に異なるぐらいに変容を遂げましたが、平良が生前に残した写真は、その多くはモノクロの銀塩写真です。今日でも、芸術表現としての写真には、モノクロのアナログフィルムが使用されることは少なくありませんが、それが「当たり前」だった時代に、沖縄の写真家は、どう沖縄という場所を見つめたのか、その「ルック」を、本書を通じて再確認してもらいたいと願います。

『インスタグラムと現代視覚文化
レフ・マノヴィッチのカルチュラル・
アナリティクスをめぐって』

久保田晃弘・きりとりめでる 訳編著
ビー・エヌ・エヌ新社、2018年



/740.1/I57/

本書には、北米のアーティスト兼研究者であるレフ・マノヴィッチが、インスタグラム上での、人々の映像を扱うふるまいを分析した論文が翻訳掲載され、関連する研究者の論考が掲載されています。今日における、SNSでの「ルック」とはいかなるものであるか、それを考えるきっかけになれば！



/007.3/I89/

『アフター・テレビジョン・スタディーズ』
伊藤守・毛利嘉孝編

せりか書房、2014年

20世紀半ばの、まだ高級品だったテレビというメディアの時代を振り返れば、インターネットに比べれば、テレビは既に「遅いメディア」になってしまい、様々な困難な問題を抱えています。そんな21世紀のテレビに、いかなる展望が見いだせるのでしょうか？

『イメージの前で 美術史の目的への問い』
ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン

江澤健一郎訳、法政大学出版局、2018年



/702.01/D73/

美術作品は、いわゆる現代美術はともかくとして、主として物質から組織され、それが固有の「ルック」を持ったイメージとして作品化されます。本書では、その「イメージの前」にある、美術作品から読み取れる思想や哲学がいかなるものであるかが論じられています。「ルック」の前後になにがあるのか？



/902.09/Ko92/

ジェンダー
『性差事変 平成のポップ・カルチャーと
フェミニズム』

小谷真理

青土社、2021年

近年のポップ・カルチャーには、これまでの「守られる性」といったような女性のステレオタイプな「ルック」を逸脱するようなキャラクターが数多く登場します。それはいかなる理由によるものなのか、本書は具体的に作品を論じつつ、その理由を深掘りしてくれれます。

『すぐわかる絵巻の見かた』

榎原悟監修

東京美術、2012年



/721.2/SU49/

巻物に、横に長く長く描かれる絵巻ですが、「見かた」があります。漠然と見ればいいんでしょ？と思いがちですが、絵巻なら絵巻、掛け軸なら掛け軸、屏風なら屏風、といったように、それぞれの「見かた」があります。その「見かた」の第一人者が監修した書物です。



/520.4/TA71/

『視線とテキスト 多木浩二遺稿集』
多木浩二

青土社、2013年

建築や視覚芸術を通じて、視線とその権力の作用について、たぐいまれな思考を紡いだ思想家の多木浩二(1928-2011)の短めのエッセイがまとめられた書物。決して易しい本ではありませんが、「ルック」からいかに思考を立ち上げるのか、そのスリリングな過程が追えます。

『ウィンドウ・ショッピング
映画とポストモダン』

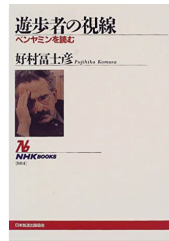
アン・フリードバーグ

井原慶一郎・宗洋・小林朋子訳、松柏社、2008年



/778.04/F47/

近代初期のパノラマから、映画を通じて、ヴァーチャルリアリティへ。視覚にかかわる技術は、時代を追って変遷していきますが、共通するのは、それぞれウィンドウ・ショッピングをしながら街を練り歩くのと同じで、「移動」という点です。本書は、移動するルックの書物です。



/940.28/B35/

『遊歩者の視線 ベンヤミンを読む』
好村富士彦

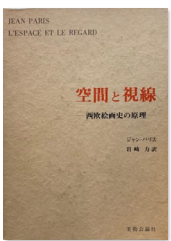
日本放送出版協会、2000年

都市のパッサージュ（アーケード）を通り抜けることで、その思想を紡いだのは、20世紀前半を代表する哲学者の一人のヴァルター・ベンヤミン（1892-1940）です。「見る人」ベンヤミンの思想は、視覚にかかわる文化の創造に今日なお影響を与え続けています。本書はその格好の入門書です。

『空間と視線 西欧絵画史の原理』

ジャン・パリス

岩崎力訳、美術公論社、1979年



/723.01/P23/

ルネサンスの時代に発見され、体系化された技法に、遠近法、とりわけ透視図法というものがあります。絵画平面上に、3次元的な空間を描く技術です。ヨーロッパの画家たちは、そうした空間のなかで、いかに表現を組み立てていき、思考していったのか、その原理が本書で詳述されています。



/778.4/C14/

『SF映画術 ジェームズ・キャメロンと
6人の巨匠が語るサイエンス・フィクション
創作講座』

ジェームズ・キャメロン

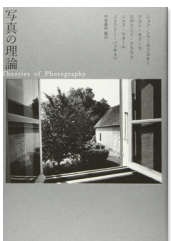
阿部清美訳、DU BOOKS、2020年

ハリウッド超大作の巨匠、ジェームズ・キャメロンが、現代の映画の巨匠たちと語り合った、SF映画についての本です。SF映画は言うまでもなく、新しい映像のあり方の「ルック」を開発してきた歴史を持ちます。本書を通じて、SF映画の歴史と現在によろこそ！

『写真の理論』

甲斐義明編訳

月曜社、2017年



/740.1/SZ/

現代の写真表現について論述された、英語で書かれた超重要論文が日本語訳されて編纂された書物です。写真はカジュアルなメディアですが、それを真剣に考えると、とたんに哲学的な思索に誘われます。写真を見る(ルック)ことを、考えてみるための書物です。



K/75/SU14/

『琉球紅型のイメージと実像』

須藤良子

KADOKAWA、2014年

沖縄においてはあまりにも「知ってるつもり」の紅型。本書は、私たちが知っている「紅型」の典型的なイメージが、歴史を遡れば、必ずしも同じものではないことを教えてくれます。「ルック」の先入観が根強いことが、目からウロコで理解できます。